

医事・文談 九百五十 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その238

子規と漱石(四十七たび続)

長塚 節の病状について、ややくどいくらい記述した。節が子規の愛弟子であったこと、節が自己の病気の最後をゆだねた久保猪之吉への紹介状を書いた漱石、その猪之吉の夫人より江がまだ幼い頃、子規と面識があったこと、節もより江夫人と近づくことなど、福岡ではいろいろ世話になって居ることなど、人事の複雑にして多岐にわたる関係があることを明らかにしたかったからである。節の病状については、「日本医事新報」No.一七一七、No.一七二一(昭和32・3・23・32・4・20)に、当時九州大学医学部第三内科に勤務の右田俊介氏が「長塚 節の病床日誌」と題して発表して居られ、それを参考にさせていたのだ。

節が五たび九大病院を訪れ、久保教授の診療を受け、遂にここで36歳の一生を終わったのは、大正4年2月8日のことである。この間の外来日誌3部、入院日誌2部が、九大の久保記念館に保存されている由で、それらと節が自らつけていた日記からとを関連させて記述されたのであった。尚入院・外来の日誌は、すべてドイツ語で記載されていて、当時の語学の水準の高いのに驚くと氏は書かれている。ここではすべて翻訳して書くことと誌されている。

長文の記述のなから、病状の進展と、節とより江夫人との接触について抜書をする。より江夫人は、節が子規の愛弟子であることを承知で親切にされたのであろう。何よりより江夫人は「ホトトギス」の同人であったから、俳句を作る漱石のことは勿論知っていたであろうから、その漱石の紹介状を持ってきた節については、ひとごとならず親近感を抱いていたものと思われる。

節が久保教授の診療を受けたのは以下の如くで、明治45年(大正元)4月から、大正4年2月死亡までの約2年10カ月に及ぶ。頼りきっていた

と思われるが、咽頭結核のほかに、肺結核も重症で、死因はむしろ内科の方であったのであろう。明治45年(大正元)4/25 初診

この日が九大病院での初診であるが、44年11月東大の岡田和一郎教授、福岡へ来るまでの途、京都大和辻春次教授などの診を受けている。少し赤いところがあるので、手当をするとすればそこにするのだが」ということであったことは前述した。

そこで翌日には鹿児島方面への旅行に出掛け、薩摩半島の南端の開聞岳に登ったりして、舟で長崎に渡り、5/7福岡に戻ってきた。そして翌日から咽頭会厭部の一部に電気焼灼を施す療法を数回受け、6月下旬海を越えてさらに彦岐・対馬に遊び、7月初旬博多を発つて、途中も所々を見物しながら9/26郷里に帰った。実に15日に及ぶ旅行である。日記の会計簿によると、費用は四二〇円九〇銭にのぼる。当時なら家が一軒建つくらいの金額である。それも県会議長をつとめた父をもち、富裕な農家の長男であったからだ。

折角、久保教授の診を受けるために、はるばる福岡まで来ながら、診察一日だけで旅を続け、再度受診では焼灼などの治療を約2カ月受けている。初診と再診との間に、局所の症状に変化か進展が見られたのであろうか。

久保教授の初診の時は、それまでの治療で、結核の症状が殆んど消失していたのであろう。それが「少し赤いところがあるが」ということだったのであろう。既に岡田教授により一部切除され、更に京都で和辻教授による手術を受けているので、手術の痕があるばかりで、あとは発赤があるばかりであったのであろう。そこで電気焼灼をしただけであ

その後は大したことはなく、時々上京して、根岸養生院(耳鼻科)、神尾医院(耳鼻科)、橋田病院(内科)の診察を受け、当時流行の岡田式静坐法を始めたりしている。

(表紙写真)

樹影

札幌市医師会 佐藤 龍也

少しづつ強まる陽射しに春の訪れの近さを感じずる三月中旬、仲間と富良野に出かけた。ここ、東山地区は未だ一面純白の雪で覆われていた。陽が翳り始めた午後、ポプラ並木の影が、真っ白な雪面に長く伸びているのを見た。その

影も雪も心なしか、僅かに青みを帯びていて、水面への映り込みとは一味違った別の美しさを感じた。その中を勢いよく走り抜けている野兔の足跡にも想いが湧き、命の鼓動がそれから伝わってくるような感じがした。